

---

# 小悪魔な女の出来方

桜花

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

小悪魔な女の出来方

### 【Zコード】

N4701D

### 【作者名】

桜花 桃

### 【あらすじ】

私は誰と交際しても【小悪魔】と言われてきた。何故かわからな  
い、誰と付き合っても誰かを・・・何かを求めている自分がいた。  
二股三股は当たり前、公認にさせてしまつ私つてなんだろ??

心の何かが引っかかり、それでも小悪魔になつていいく（前書き）

この物語は全てフィクションです。

物語を読んで嫌悪感を抱く方は読むのを中止して下さい。

心の何かが引っかかり、それでも小悪魔になつていぐ

## 【1章】

### 小悪魔誕生

私が中学3年生の時だつた。

あの頃はまだ可愛い女の子、そつクラスの男の子とも仲良く、ちょっとやんちゃだった男の子とも仲良く過ごしていた頃。

私は同じクラスのサッカー部の男の子に片思いをしていた。

彼はとてもシャイで女の子とは基本的には自分から話すタイプではなかつた。

そんな彼が私にはいつも話しかけてくれていた。

顔も格好よく、運動も出来て頭もよい。

そんな彼に私は恋をしていた。

彼もきっと気が付いていたはずだつた。

周りの友達も絶対両思いなんだから告つちゃいなとまで（笑）助言してくれていた。

だけど告白・・・受験が終わつたらこじよつ

そう1-2月に決意した。

そんな時、クラスの委員長から呼び出しがあつた。

「卒業文集をクラスで作るんだけど、委員になつてくれない？」

「何で私に？」

「一緒にお前とやりたいからさ、他にも何人か声掛けてるから」

「うーん・・・わかった。委員長の頼みならいよ」

そう安易に引き受けてしまつた。

委員長とはたまに会話はする仲ではあつたが、何かを頼まれるほど親しかつた訳ではなかつた。

不思議に思いながら、文集委員をやるのか・・・と委員長の背中を

見ながら思つた。

年の瀬も迫る頃に委員長から電話が入った

「冬休み中に一度打ち合わせするから さん宅に集合な

「うん、わかった」

文集を作ると言つ事は卒業する事・・・

そう思いながら片思いの彼に年賀状を書いていた。

受験頑張つてね！応援してるから

なんてドキドキしながら書いた記憶がある（笑）

彼からも年賀状・・・来るかななんて考えながら

新年になり、彼からも彼らしい不精な年賀状が届き、部屋ではしゃいでいた。

そして、文集委員の集まりの日が來た。

総勢6名の文集委員達。勿論クラスメイトだから顔馴染みでもある。どんな事を書こう、どんな事をアンケート取るかと2時間余り議論して担当を決め

その日は解散した。

ただ、受験の真っ只中だったのでどうしてもみんながいつぺんに集まる訳がなかつた。

そして、場所的に一番集まりやすい委員長の家に休みの日に集まりだした。

学校以外で会う事はあまりなかつたから、話は勿論脱線しまくつた。ゲームをする者もいれば、好きな子は誰？！なんて会話もみんなでしていた。

そして、委員長の好きな子の話になつた。

「俺は話しやすくて、可愛くてほつちやりでちつちやい子が好きだな。」

「・・・まさか私？と思つては見たがまさか・・・ねえと口には出さなかつた。

私も聞かれたが適当に誤魔化していた。

学校でも休み時間に文集委員で集まつて、アンケートの集計や表紙を書いたり

着々と出来上がつていた。

そして個人のページもクラスメイトがみんな協力してくれ、全員のページが集まつた。

私の片思いの彼のも勿論だ。

一人こつそり見ていた。ぶつきらぼうな彼の文章。

早く受験よ終われ！！そう思った。

そして他の人のをバラバラ見ていくうちに委員長のページに目が留まつた。

“僕の好きなタイプ”

話しやすくて、可愛くてほつちやりしていて小さい子。

目がクリクリしている子。

・・・これって私？じやあ・・・無いよね (\* - -) うん

その時も軽く流して終わつた。

文集が出来上がつた頃に受験が終わり、私も彼も別々の高校に行く事が決まつた。

彼が無事に合格したので、卒業式に告白しよう。そう決めた。

そんなるある日曜日、委員長に文集委員は委員長宅に集まるようひと言わされた。

私は時間前に委員長宅に行つた。

「おつ、早いなあがつて」

「みんなは？」

「まだだよ、おいでよ」

そつ言われいつも通りに委員長の部屋にお邪魔した。

もう何度も文集の編集でお邪魔した部屋なので勝手もわかり、コタツに入つてみんなが来るのを「口口口口しながら待つていた。

委員長も一緒に「口口口」していったが、私はウトウトと睡魔が襲ってきた。

田を瞑りながら・・・

（委員長・・・絶対私の事が好きだ。寝たふりしてキスしてきたら・・・）

なあんて考えてしまった。

まあやつてみよおと・・・」で小悪魔が降臨したのだ。

田を瞑り、寝たふりをする。

委員長が私の髪を撫でる・・・

顔に熱の気配を感じる

そして唇に何かが触れた・・・。

（やつぱり）

それが私のファーストキスの感想だったのだ。

勿論ちよつとはドキドキはしたけどね。

「じめんね、ずっと好きだったんだ。あまりにも寝顔が可愛かったから・・・」

それから改めてのキス

お互いが初めてだったけれど、ゆっくりした時間でずっと顔を重ねていた。

そして・・・文集委員はこの日勿論

集まるわけがなく、委員長の策略でしたよ（笑）

何となく予感はしていたんだけどね。

それから委員長が私の彼になり・・・ました。

そしてこの田から【小悪魔】が誕生しました。

## 【2章】

後ろ髪引かれ・・・す

春が来て新たな制服を纏い、それぞれ違う高校へ進学した。

彼は市内有数の進学校。私は市外の普通の私立の高校で、お互いの高校は方面は真逆。

彼は両親とは別に独り暮らしをしていた。

朝、駅で私を見送ると彼は別の電車で高校へ向かう。

高校も終わり、帰る家は彼の部屋。

彼のベストで寝たふりをする私に、彼はそつと制服を脱がす。彼の興味深々に私も付き合う。

（男つて・・・身体が目当てかよ・・・勝手にやつてろ）

勿論私も初めての経験ばかりで興味は少しだけ・・・はあった。あつたはずなのに、心では、彼を見下していた部分も有った事は事実。

お互いの身体を調べ合い、そして私は夕方に自宅へと帰っていた。

そんな毎日を送っていて、数週間後。

時はやつてくる。

15歳になつたばかりでの初体験。

当時だつて世間では15歳であれば、SEXや異性への身体の興味はみんな持つていただろう。

私?私はSEXには興味が無かつた。

異性への興味は勿論あつた。好きだつた人もいた。

だけど、SEXへの好奇心は多分同年代の子の中でもかなりの欠落であつたと思う。

実はSEX=子供が出来るという公式すら知らなかつた。

彼と初体験をした時、勿論避妊なんて知識は無かつたし、彼にされるがままの状態で

処女を失つた。処女を失つた事は別にどうでも良い事に感じた。

ただ・・・帰宅後、入浴する時に脱いだショーツに血が付いていたのは事実だつた。

日曜日になると、彼の家に行き裸で戯れる。

平日だと学校帰り合鍵を持つて彼の家でまた戯れる・・・

毎日彼と一緒にいた  
そして事半はやつてくる。

生理が来ない・・・。

私はパニックになつた。勿論彼にも相談した。

た。 徒に高柳を舐めて喰くたり一縄同が空三。 産んで浴ししと言。

その言葉に私はひこくにした

## 子供を産む？

# 私がママになる？

向親にかんするもの

別れをやがてやる・・・

そんな事を当時日記に書いて自分なりに悩んでいた。

呼ばれた。

「あなた・・・妊娠してるの？！そういう事をしたの？！」

中二ノノリ 田久一

私も泣き崩れた  
・  
・  
・

卷之三

次の日に極度の吐き気が襲い、母に伝え学校を休んだ。

「…こんな子に育てた覚えは無いわ…」

その寺復部工敷ノハ敷痛毛半ノ、區仕も繰り返シテ。

トイレに駆け込むと・・

(きた・・・=)

そう・・・生理は遅れてやつてきたのだ。

心は踊り、急いでトイレから出て母へ伝えました。

「お母さん生理きたよ！よかつた・・・」

母も安堵した様子で、また泣いていた。

だけど、ここで問題が解決した訳では無かつた。

この妊娠事件は勿論父の耳にも入つていた。

そして、私が学校に行つている間に、母は彼の実家に乗り込んで一部始終を彼の母に言い、私達はお互いの親に別れさせられた。彼の事は好きだつたけど、両親をここまで悲しませてしまつて、別れる結果になつても仕方ないと思つていた。

乗り降りする駅も変えさせられ、駅までも母に送迎され、束縛された。

休日は常に親と一緒にいた。

勿論彼にも会う事も電話する事も出来なくなつた。

連絡の術を無くした。当時携帯やPCなんてなかつたから仕方なかつた。

親に束縛された生活が高1の梅雨の頃に始まつた。

普通ならそんな生活は嫌だと思つ。

でも、私は従つていた。

もう親の悲しい顔を見たくはなかつたから・・・。

でも、学校生活は別だつた。

意外と私はモテるらしくて、駅で告白されたり・・・

でも、親の監視下にあつた当時は誰とも付き合つてはいなかつた。

監視も薄れた高2の春に、新しい彼が出来た。

私の好みで、同じ年の違う高校で色黒で背が185cmもある学年が似合う人だった。

連れて歩くのにいい感じな彼だった。

文化祭に彼が来て、一緒に祭を楽しんだ。

その帰り初めて手を繋いだ。

あの頃つて可愛すぎるなあ私・・・w

でも、心の中では（男つて絶対・・・）

それは消えなかつた。

だからまた彼の家に遊びに行つた時に試した。

そしたら案の定・・・

そして彼とは別れた。

私は何を求めて男の人と付き合つんだろう  
自分でもわからないまま、そしてまた誰かを探す。

心の何かが引っかかり、それでも小悪魔になつていぐ（後書き）

この物語を読んで頂きありがとうございました。  
あなたの心に何か残つたのなら幸いです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4701d/>

---

小悪魔な女の出来方

2010年12月16日15時27分発行